

## ゆるぎない確信をもってたたかいぬく

### 坂牛哲郎学長の意思を受け継ぎ、思想的発展を

2003年に労働大学再建にあたり、実践と理論を指導され、労働大学学長として、その後の労働大学の発展に全精力を傾けていただいた坂牛哲郎学長が、2021年3月12日にご逝去されました。享年・95歳でした。坂牛哲郎学長のご逝去をいたみ、心より哀悼の意を表します。

坂牛哲郎学長の著書『社会を変える、自分を変える』の「あとがき」に、「資本主義は強大に見える。しかし、それはハリコの虎である。敵は拡大する諸矛盾に、のたうちまわり、労働者・市民を食い殺し、傷つけているのである。この虚像の実態をはっきりつかみ、現実のたたかいを一歩前進させるために、この本は書かれたのである。この本を武器とし、足りないところは自らの英知により、補い、ゆるぎない確信をもってたたかいぬくことを心から願う。」と記されており、私たちの運動にたいする期待と成長を願っています。

私たちは、坂牛哲郎学長の意志を受け継ぎ、労働大学の発展のために、科学的社会主義、マルクス・レーニン主義思想に学び、大衆学習運動を全国の職場と地域にひろめていくことに、全力をあげて取り組む決意です。

### 労大闘争は思想闘争である

労大労組支援共闘会議代表・坂牛哲郎として指導された「労大闘争は思想闘争である」の問題提起について、労働大学再建の原動力となり、今日でも私たちの教訓として、労大運動前進への礎になっています。

2001年8月26日に労大労組支援共闘会議発行の『大衆学習運動の灯をまもる』のなかで、「…労大の理念を捨てた指導部が、その理念を忠実に守りたたかう被解雇者らを異端として思想差別し、遂には解雇したのである。『まなぶ友の会員』たるものはすべてこの事実から目を背けてはならない。労大再生の道は、今次労大闘争を、単なる敵首反対闘争に限定することなく、はっきり思想闘争として位置づけ解雇を撤回させること以外にない。友の会員には、この点の理解がまだ不十分である。労大指導部の変質を単に運営上の非民主主義と考える人が多い。問題はもっと深いところにある。階級的視点を失えば、理論は崩壊してゆくのである。思想、学習集団として成立し得なくなった結果の財政危機なのである。」と、問題の本質を明らかにし、私たちに警鐘をならしています。

### マルクス主義の学習以外にない

今日の資本主義社会の改革にむけて、労働者階級が中心とならなければならぬことを学ぶには、マルクス主義の学習以外にありません。マルクス主義は、額に汗して働く労働者階級の思想だからです。1867年に出版した『資本論』第一巻の序文にマルクスは、結びの言葉として「汝の道を行け、そして人々の語るにまかせよ！」と書いています。徹底的に考えぬかれた『資本論』への確信が、この短い言葉のうちに表わされています。

資本主義とはどんなに冷酷なものか、合理化とは何か、労働者はなぜ組織的に結集しなければならないのか、反合理化闘争とは階級的組織づくりであり、職場闘争こそ階級闘争の土台である、三池労働者運動は、闘いの中で学び組織してきました。

再建労働大学の「中央講座」が、坂牛哲郎学長の指導の下に始まり、私自身学んだことがたくさんありますが、特に学習に対する態度です。与えられた問題・課題についてのレポート提出で、採点されるという経験をさせていただき、問題のポイント、本質を掴む学習の重要性を学びました。読書についても、柱をすえた学習態度と、読みながら考え、考えながら読むようになりました。私自身にとって、大きな一歩でした。中央講座参加者の皆さんも、きっと同じ思いを持ったと思います。

### **資本主義社会の本質解明と仲間意識、同志意識**

私たちにとって一番必要なことは、今日の社会の根本的な矛盾を知らなければならないということです。具体的な問題、課題を議論することはもちろん重要ですが、資本主義の本質を解明する学習が大切だと思います。私たち労働者は、唯物史観と『資本論』に学び、労働者階級の歴史的使命を自覚し、科学的社会主義に不動の確信をもって生き抜く人間になろうと、確認し合い努力してきました。

もう一つ大切なことは、学習と相互討論を通して、仲間意識、同志意識をつくりあげていくことです。労働者階級の唯一の力は、組織的な団結力以外にありません。よりよく生きるためにも、各人の個性を生かす協力体制が必要です。内外の五人組運動をとおして、特に外部への一歩踏み込む勇気と、人間的なかかわりの中で組織することです。日常的な話し合いによる信頼関係の構築です。その担い手は、第一学習会による会員の成長と団結です。

### **目指すは人間性回復、人間解放**

労働者の哲学はまず、人間性回復、人間解放の哲学であるということです。それは、資本の非人間性にたいする抵抗闘争としてはじまります。競争と差別の職場支配に抗する闘い、労働者への分断攻撃に立ち向かう組織づくり、国鉄闘争からも学びました。人間の価値をきめるのは歴史です。私たちは、この歴史の発展に寄与することに自らの生きがいとして、生涯かけてとりくむ以外にありません。闘い一生、学習一生、社会主義に対する熱い思いです。

私たちが困難を乗り越えて、一歩踏み出す力は、自らが労働者として生きること誇りをもって、仲間と共に力を合わせ、ゆるぎない確信をもってたたかいぬくことです。

本日、皆さんから貴重な意見として出された成果と課題について、困難な条件を乗り越えて一歩前進させるためにも、将来を見据えた事務局体制の早急な補強と、「まなぶ友の会」運動と一体になって、大衆学習運動を前進させていく努力を積み上げていきます。

労働大学再建、2004年1月号として『月刊まなぶ』の発刊を実現させて以来18年目に入っています。編集部の並々ならぬ努力や、多くの先輩方、仲間の執筆と意見、感想等々で中身も充実してきました。本日、編集内容について問題提起された点については、編集会議で検討させてください。

『月刊まなぶ』拡大運動は、労働大学運動の柱でもあり、資本に対する怒りを組織する具体的な運動です。私たちはもっと大胆に、すそ野を広げる拡大運動に全力をつくし、皆の手に『月刊まなぶ』を！です。ありがとうございました。